

6 防除対策推進上の問題点及びその対策

農作物名	病害虫名	問 題 点	対 策
水 稲	いもち病	・防除時期の遅れ ・耐病性が弱い品種の作付増加 ・高温条件下で葉いもちが多発するなど、従来にない発生様相を呈する場合がある。	・BLASTAMの活用による発生予測 ・発生初期の防除 ・常発地における粒剤による予防防除の徹底 ・品種の特性に応じた栽培管理・防除の実施
	ヒメハダ	・圃場による虫の密度差が大きく、また株元に寄生するため生息状況を把握しにくい。 ・長期残効性の箱処理剤が普及したため、本田期防除に対する意欲が低下し、適期防除が行われにくい。	・発生状況の的確な把握 ・適期（幼虫のふ化前期）防除の徹底
	コナカイ	・被害葉が目立つことや被害量、増殖量の予測が出来ないため、過剰に防除する傾向にある。 ・飛来時期、地域により、発生時期や増殖量が異なる。 ・ウンカ類に対する長期残効性の箱処理剤が普及したため、ウンカ類飛来時の薬剤散布回数が減少して、本虫に対する防除圧も低下している。	・被害量、増殖量の予測法の確立と要防除水準の設定 ・地域における発生予測体制の確立 ・適期（幼虫のふ化前期）防除の徹底
	斑点米かみし類	・休耕田、雑草地で増殖し、そこから飛来し加害するため、発生量の把握が困難である。また薬剤による防除効果が上がりにくい。 ・薬剤の残効が短い。	・雑草地における発生状況の把握 ・フェロモン剤等の簡易な発生予測法の確立 ・雑草の除去、雑草地における薬剤防除 ・一斉防除の実施 ・長期残効性薬剤の開発
	スミシロカイ	・本田、用水路における有効な防除手段がない。 ・大雨時に浸冠水する地域が多く、用水路から本田へ虫が大量に侵入する。 ・湛水が出来ない圃場では、I B P粒剤の本田施用が出来ない。	・用排水路からの侵入防止柵（網）の設置 ・用水路における防除法の確立 ・浸冠水地域の圃場整備 ・天敵、微生物等による生物的防除法の確立 ・効果の高い薬剤の開発と登録
大 豆	ハモシヨトリ	・発生初期の防除が行われないと、その後増殖して防除が困難となる。 ・茎葉が繁茂すると薬剤が虫体にかかりにくく、防除効果が上がらない。 ・齢が進むと薬剤の防除効果が低下する。	・的確な発生状況の把握と発生初期の防除 ・適期（若齢幼虫期）防除の徹底 ・有効薬剤の開発と登録 ・天敵、微生物等による生物的防除法の確立
ばれいしょ	疫 病	・初期防除の遅れや防除不徹底（散布量の不足等）による多発。 ・好適条件下では発生後の病勢の進展・拡大が極めて速い。 ・フェニルアミド系剤に対する耐性菌出現のおそれ	・適期防除と適正量散布 ・薬剤の輪番使用 ・粉剤並びに無人ヘリの利用など簡便かつ有効な防除法の確立 ・薬剤感受性検定の実施と検定結果に基づいた有効薬剤の使用
	Yモザイク病	・近年の発生増加で広域的に罹病種いもが増加。 ・種いも更新の不徹底。 ・アブラムシ類の防除不徹底。 ・野良生え等の圃場管理の不徹底。 ・現在の主要品種（ニシユタカ、デジマ）での病徴等の発生様相や病原ウイルスの系統等の性状に不明な点が多く、本病の早期発見や防除対策が困難である	・種いも更新の徹底（地域的・広域的） ・アブラムシ類防除の徹底（地域的・広域的） ・発病株の早期抜き取り処分 ・アブラムシ類の薬剤感受性検定の実施と検定結果に基づいた有効薬剤の使用 ・主要な品種及び作型での発生様相並びに病原ウイルスの性状の解明
かんきつ	ウイルス病 温州蜜柑 病 ステッドマン 病 接木部異常病 クワイド病 (イクワネス)	・発病までに年数を要するため、早期発見が難しい。 ・病気に対する農家の意識が低い。 ・保毒検定体制が不十分である。 ・簡易で迅速な保毒検定法がない。特にウイロイド病は手間と時間を要する。	・無毒苗・穂木の使用 ・発病樹の伐採、抜根 ・はさみ等の消毒の徹底 ・農家の意識啓蒙 ・無毒母樹の増殖、配布の迅速化 ・保毒検定体制の整備 ・ウイロイド病の簡易検定法の確立
	ミカンハダニ	・薬剤に対する抵抗性が発達し、薬剤の効果が低い。 ・薬剤抵抗性の程度並びに発達する速度が、地域や圃場によって異なるため、薬剤の選定が難しい。 ・施設栽培では、乳剤を使用すると葉害が発生する恐れがあり、使用できる薬剤が限られるため、感受性の低下する速度が速い。	・冬期及び夏期マシン油乳剤の散布 ・発生初期の防除を徹底する。 ・薬剤感受性検定で有効な薬剤の散布 ・有効な薬剤の開発と登録 ・簡易な薬剤感受性検定法の確立 ・天敵等の生物的防除法の開発

農作物名	病害虫名	問 題 点	対 策
かんきつ	アブラムシ類	・薬剤抵抗性の発達による薬剤の効果不足が見られる 特に、ワタアブラムシの合成ピレスロイド剤及び有機リン剤に対する薬剤感受性が低下している。 ・地域や圃場によって薬剤感受性が異なるため、薬剤の選定が難しい。	・同一系統薬剤の連続使用を避ける。 ・発生初期の防除を徹底する。 ・有効な薬剤の開発と登録
	ミカンカイロアザミ	・薬剤感受性が低く、効果の高い薬剤が少ない。	・効果の高い薬剤の開発と登録 ・施設内部及び周辺の除草
かんきつ な し	カメムシ類	・生態について不明な点が多く、飛来及び加害の有無やその時期について、予測が困難である。 ・移動性が高いため薬剤散布のタイミングが難しく、また薬剤の残効が短く、十分な防除効果が得られない。 ・合成ピレスロイド剤の使用回数が増えるとミカンハダニの多発生をまねく。	・カメムシ類の生態の解明 ・飛来予測技術の開発 ・フェロモン剤利用等による簡易的確な発生予測法の確立 ・効果が高く残効の長い薬剤の開発 ・天敵や微生物等を利用した生物的防除法の開発 ・フェロモン剤等を利用した防除法や忌避灯等の物理的防除法の開発及び確立
び わ	灰 斑 病	・効果の高い薬剤が少ない。	・効果の高い薬剤の開発と登録
	褐 斑 病	・登録薬剤がない。	・他病害との同時防除 ・効果の高い薬剤の開発と登録
び わ な し	白紋羽病	・効果の高い防除法と効果の高い薬剤がない。 ・立毛中の防除が難しく、現行の防除法では労力がかかり効果が十分でない。	・植付前の土壌消毒 ・効果の高い薬剤の開発と登録 ・立毛中の簡易な防除法の確立
茶	赤 焼 病	・効果の高い薬剤がない。 ・発生生態が不明で、防除適期も明かでない。	・効果の高い薬剤の開発と登録 ・発生生態の解明 ・耕種的防除技術の確立
	ワシロカイガラムシ	・樹冠内部の枝幹に寄生するため、発生の早期発見が難しく、散布薬剤が到達しにくいいため、防除が困難である。	・ふ化時期の的確な確認と迅速な伝達 ・天敵や微生物利用による生物的防除法等の有効的な防除法の確立
いち ご	炭 疽 病	・罹病性品種の栽培。 ・潜在感染株を親株床、本圃に定植。 ・潜在感染株の判別が困難である。 ・汚染圃場（親株・育苗床）の連用。 ・耕種的防除（雨除け、全面マルチ等）の不徹底。	・抵抗性品種の育成。 ・潜在感染株の簡易検定方法の開発。 ・育苗初期からの耕種的・化学的防除の徹底。 ・親株・育苗床の更新又は土壌消毒の徹底。 ・有効薬剤の開発と登録。
	ハスモントリ	・有効な薬剤が少ない。 ・開花交配期の液剤散布は奇形果を生じる。また、受粉用のミツバチに影響のない薬剤が少ない。	・フェロモントラップ利用による薬剤防除適期（若齢期）の把握 ・他害虫との同時防除 ・開花期前の徹底防除 ・ミツバチに影響のない有効薬剤の開発と登録
アスパラガス	スリップス類	・登録薬剤がない。	・他害虫との同時防除 ・有効薬剤の開発と登録 ・耕種的及び物理的防除技術の確立
ばれいしょ アスパラガス ね ぎ カーネーション にんじん	シロイモジヨトリ	・薬剤感受性が低く、有効な登録薬剤がない、あるいは少ない。 ・薬剤がかかりにくいところに生息して食害するので、薬剤の効果が上がりにくい。 ・傾斜地が多いため、露地栽培でのフェロモン剤による密度抑制（交信攪乱）効果が上がりにくく、導入が難しい。	・他害虫との同時防除 ・有効薬剤の開発と登録 ・施設栽培での防虫網による耕種的防除法、フェロモン剤による密度抑制、青色蛍光灯によるトラップ、薬剤防除法等を組み合わせた総合防除
いち ご 花 き 類 (カーネーション 他)	タバコガ類	・有効な登録薬剤がない。 ・花蕾の内部など薬剤がかかりにくいところに生息して食害するので、薬剤の効果が上がりにくい。 ・発生生態が十分に解明されていない。	・他害虫との同時防除 ・有効薬剤の開発と登録 ・発生生態の解明 ・耕種的、物理的及び生物的防除法の確立
き く ガーベラ ト マ ト な す	マハガリハエ	・登録薬剤がナスではなく、またトマトでは少ない。 ・苗での寄生の発見が難しく、寄生苗の移動により発生地域が拡大。 ・ナスやトマトなど出荷物に直接大きな被害を及ぼさない作物における防除の目安がない。	・他害虫との同時防除 ・被害葉の除去や収穫後の被害残渣の徹底処理 ・育苗時の徹底防除 ・防虫網の設置や黄色粘着トラップ（ＩＴシート）による防除等、耕種的並びに物理的防除技術 ・要防除水準の設定

農作物名	病害虫名	問 題 点	対 策
いちご きゅうり きく ガーベラ トウモロコシ ばら	ミカンイロアザミウマ	・ 苗による持ち込みで、発生地が年々拡大している。 ・ 薬剤感受性が低く、有効な薬剤が少ない。 ・ 他のアザミウマ類との肉眼判別が難しく、薬剤の選定等適切な防除が困難である。	・ 有効薬剤の開発及び登録
トマト	黄化葉巻病	・ 年々、発生地が拡大しているが、その要因が究明できない。 ・ 発生生態に不明な点が多い（オシロイアザミウマによる伝搬、アザミウマの経卵伝染及び他作物での病徴等）。 ・ 媒介昆虫であるオシロイアザミウマの防除が困難である ・ 簡易な診断方法が無い。 ・ 育苗期に使用できる粒剤が少ない。 ・ 病株の抜き取り、アザミウマ進入防止ネット設置の不徹底。	・ 育苗期からの防除の徹底。 ・ 圃場内部及び周辺の除草の徹底。 ・ 農家以外（家庭菜園など）のトマト栽培者への意識啓蒙 ・ 簡易診断方法の開発。 ・ 有効薬剤の開発及び登録。